

日本文化における〈見立て〉と日本語

百留康晴

はじめに

日本文化における庭園、浮世絵、歌舞伎、和歌、俳諧などの芸術の世界では様々な〈見立て〉が用いられている。また日本語においても「月見そば」「(牡蠣の)土手鍋」「(鯛の)兜煮」等の命名に〈見立て〉が認められる。このような日本文化や日本語において確認できる多種多様な〈見立て〉の背後には「ある事物に他の事物の像を重ね合わせる」という共通の基盤があると考える。これまで日本語が問題の事態に身を置き、臨場的、体験的に語る、という言い回しを好む言語であること¹⁾や、人と人が相並んで目の前の映像を注視するという形を基本として、言葉が組み立てられているということ²⁾が指摘されている。本論では日本文化の基層をなす〈見立て〉を起点とし、その日本語への現れを指摘するとともに、両者と日本語の持つ臨場的、体験的に語ることを好む傾向、映像的であるという特徴との関わりを論じたい。

一、日本文化における〈見立て〉

前述のように日本文化における庭園、浮世絵、歌舞伎、和歌、俳諧などの芸術の世界では様々な〈見立て〉が用いられている。以下簡単に例を挙げる。

和歌では『古今集』で〈見立て〉の技法が確立し、桜を雪に見立てた〈見立て〉が以下の歌に確認できる³⁾。

み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれ
ける
古今集・春上・六〇・紀友則

桜の花の盛りに、久しくとはざりける人の来た
りける時によみける

読人しらす

あだなりと名にこそ立てれ桜花年にまれなる人も待
ちけり
(古今集・春上・六二)

返し

業平朝臣

今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありと
も花とみましや
(古今集・春上・六三)

日本庭園では石や橋などの配置により、名所旧跡が表現される。そしてそこには石や橋を特定の名所旧跡に見立てるといふ行為がある。例えば福岡県柳川の松濤園では日本三景の松島が、京都の桂離宮では天橋立が、池に配置した石や橋等によって縮小して表現されている。また京都竜安寺の石庭など枯山水では砂を水に見立て、池や流水を用いず、石と砂で山水の風景を表現している⁴。江戸時代には風景の〈見立て〉も盛んに行われ、近江八景、金沢八景は中国瀟湘八景の〈見立て〉と考えられるし、近江富士、讃岐富士のように、日本各地で富士山の〈見立て〉が行われた⁵。このような風景の〈見立て〉は現在でも日本各地に「小京都」と呼ばれる都市が存在することや、「〇〇銀座」という名称の繁華街が存在することとつながる。

浮世絵では「見立絵」が作られ、鈴木春信の見立絵には美女を七福神の恵比寿や大黒に見立てて描いた「見立恵比寿」「見立大黒」がある。他に藤原定家の歌「駒とめて袖うちらはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」を踏まえた「見立佐野の渡」もある。「見立佐野の渡」は町娘が振り袖を上げて雪をしのぎながら橋を渡る

様子が描かれている⁶。「佐野の渡」が絵画に描かれる場合には、馬の背に乗った定家が袖をかざしながら川を渡る構図となる。春信の「見立て絵」では、定家が町娘におきかわっている⁷。

歌舞伎でも四世鶴屋南北作「東海道四谷怪談」は「仮名手本忠臣蔵」の世界を借りており、作全体が「忠臣蔵」に見立てられた「もうひとつの忠臣蔵」という構造になっている⁸。

この他、和菓子の造形や茶道、華道の世界でも〈見立て〉が行われており、類例は枚挙にいとまがない。このような日本文化の芸術の分野における〈見立て〉は、古くから和歌の世界で行われたことや『枕草子』にも見られること⁹。また室町時代に枯山水庭園が日本独自に考案され、数多く作られたことなどから伝統的な日本人のものの見方に根差した行為であり、江戸時代に俳諧の世界を起点とし、滑稽、遊びの感覚が加えられ、文芸、絵画、庭園、歌舞伎、芸能などの幅広い分野で大衆化したものと考えられる¹⁰。

このような〈見立て〉について、服部（一九七五）では「いったんは眼を通して感覚的に受け取られたものを、いちど頭脳の知的な働きへと誘いこみ、ふたたび感覚の世界へ突き戻すという、屈折した鑑賞法を要求してくる」もので、「眼前にある「見立て」の形を通して、その奥に「見立てられた」ものの形が二重写しのようになっているの見えることになる」とする。

また〈見立て〉は〈比喩〉と類似したものと見られがちであるが、早川（一九九五）ではその違いについて次のように説明する。「譬喩においては、ある対象の特色をより理解しやすいやうに、よく知られた他のもののイメージを借りて説明するものであり、表現の目的はあくまでも見立てられる「ある対象」の解説にあると言へよう」。「見立て」は二つの物事の間類似点を見出すといふ点では、確かに譬喩と同じ方法であるが、類似点以外はできるだけ飛躍してゐることが望まれるのである。即ち、一見似ても似つかないものの中に巧みに類似点を見出すと同時に、一方では両者の相違をはつきりと認めてゐる処に、「見立て」の面白さが成り立つと言へよう。

さらに早川は江戸時代の〈見立て〉の特色を以下の三点に整理している。

- (一) 譬喩を基本とするが、ある対象の特色を説明するためのものではなく、類似点以外は出来るだけ飛躍してゐることを狙ふ。（飛躍構造）
- (二) 一見似ても似つかないものの中に類似点を発見する機知と、両者の極端な相違点を楽しむ。（滑稽構造）
- (三) 「見立てるもの」の内に「見立てられるもの」の觀念が実在するように実感される。（重ね焼き構造）

以上から本論では日本文化に見られる〈見立て〉を以下のように定義し、論述を進めていく。

（いわゆる〈メタファー〉のように）対比を通して〈類似〉や〈調和〉の発見、認識へ誘導するというのではなく、（しばしば意図的な）〈ずらし〉を施した上での対比を提示することによって、思わぬ新しい価値の発見・認識へと挑発するもの¹¹

なお〈比喩〉と〈見立て〉とを比較すると、〈比喩〉はある対象の説明のためになされるものであるから、Aという事物にイメージを重ね合わせられたBはよりAの説明に適したものとなるが、〈見立て〉ではそのような前提は一切ない、という点が異なると言えよう。そこで、〈比喩〉と〈見立て〉とを分けるものは、異なるAとBとがどのように関係付けられ、イメージを重ね合わせられているのかというところにあるのではないかと考えられる。〈比喩〉は両者が論理性、合理性に重きを置いて結び付けられたものであり、〈見立て〉は、そうではなく、見た目、そこから喚起される感覚に重きを置いて結び付けられたものである、ということである。

〈見立て〉は異なる事物の像を重ね合わせること、そして楽しむこと、それ自体に主眼を置いた行為で、受け止める側も両者の像の重なりを同時に共有し、味わうことで成立しているのである。

さて、多種多様な〈見立て〉が日本文化の芸術の世界に見られることは前述の通りで、そこには芸術というものの持つ性格から、新たな見方、表現の希求や遊び心を伴う創造性が見受けられる。しかし、日本人の言語表現にも〈見立て〉がごく自然に入り込んでいる。次に日本語におけるそのような例を検討したい。

二、日本語の命名に見られる〈見立て〉

日常会話で冗談交じりに「俺の肝臓はフオアグラ状態だ」とか「フオアグラ化している」と言うことがある。

そこには過度の飲食や飲酒により脂肪がたまった自分の肝臓を、鷺鳥や鴨にむりやり餌を食わせてきた「フオアグラ」に重ね合わせるといふ行為がある。この場合、世界三大珍味として有名なフオアグラを持ち出すことで、自分の肝臓の状態を分かりやすく伝えるという意図もある。しかし、このような発言は多くの場合、冗談めかした、滑稽さを伴った表現として発せられるし、周囲もそのように受け止める。そのため使用の実態からは説明のための〈比喩〉というより、〈見立て〉によつて生まれた蓋然性が高いのではないかと考える。

また、類例で筆者は、連日ご馳走をふるまわれ、飲食を重ねたことで満腹になり、これ以上食べられないという状態に陥ったことを「今いかめし状態だ」と表現したことがある。これもやはりある種の滑稽味を感じさせる表現で、〈比喩〉ではなく〈見立て〉であると考えられ

る。同様に「お前の頭はピーマンだ」などの表現もどちらかと言えば〈見立て〉に基づくものと考えられる。このように日本語表現の中にも〈見立て〉に基づく言語表現が見られる。そこで、以下日本語表現における〈見立て〉の介在を見ていきたい。

日本語の命名には二つの事物を映像的に組み合わせ、結び付けたものが数多く見られる。以下に示す複合名詞がその例である。これらの複合名詞における結合には〈見立て〉同様、ある種の飛躍が認められる。

月見そば・(牡蠣の)土手鍋・(鯛の)兜煮

(伊勢海老の)具足煮・霜降り肉・蟹みそ

カブトガニ・太刀魚・鉄砲魚・竜の落とし子

ほたるいか・やうりいか・はちどり・からすあげは

くまばち・かぶと虫・めがねざる・きつねざる

てんぐざる・ラツパ水仙・太鼓橋・眼鏡橋

入道雲・台風の目・ゲリラ豪雨・爆弾低気圧

天の川・鉄砲水・蟬しぐれ・桜吹雪・竜巻

波の花・湯の花・禿げ山・大根足・大黒柱

太鼓腹・石頭・獅子鼻・団子鼻・脳みそ

親指・雷親父・とっくりセーター・氷砂糖

せんべい布団・ゲリラライブ・愉快犯・

爆弾発言・自殺点・自転車操業・だるまストープ

例えば「月見そば」は汁の中に浮かべた卵を夜空に浮か

ぶ「月」に〈見立て〉るところからなされた命名である。う。「肉そば」「山菜そば」などが入っている具と結び付けた命名であること、同じく「月見」を構成要素とする「月見だんご」が「月見の際に供えるだんご」を指すことと比較すれば「月見そば」が〈見立て〉による命名であることが明瞭になる。

同様に「(牡蠣の)土手鍋」は鍋の内側に味噌を「土手」を築くように敷くところから命名されたものであり、「(鯛の)兜煮」「(伊勢海老の)具足煮」には「鯛の頭」を「兜」に、「殻つきの海老の身」を「具足」に、という〈見立て〉がある。また「霜降り肉」には肉の赤身に入った白い脂肪を「霜」に見立てており、「蟹みそ」は蟹の内臓を「みそ」に見立てたことによる命名であると考えられる。「脳みそ」も「脳」で十分内容を伝えられるにもかかわらず、「みそ」というイメージを重ね合わせている。

これらの命名における言葉の結び付けは、一般の複合名詞における言葉の結び付けとは異なり、ある事物に異なる事物を見出すというところにより主眼があると考えられる。両者の関係性において内容の説明という意味合いは薄く、異なる事物の飛躍した結び付けによって新しいものの見方を示すという創造的な趣向が感じ取れる。他に組み合わせに〈見立て〉があるわけではないが、「鯨詰め」「芋洗い」などの語には〈見立て〉による意味の転用が見出せる。

三、日本語の文章に見られる〈見立て〉

ここまで日本語の冗談めかした言い回しや、物の命名に〈見立て〉が入り込んでいることを見た。しかし、日本語の文章中にも〈見立て〉はより自然に入り込んでいる。次に文章中に現れた〈見立て〉の例を示し、〈見立て〉から見える日本語の特性を論じたい。

1に〈見立て〉が入り込んでいる例を示した。内容の背景を説明すると、小学校時代伊豆の山村で育った洪作は中学になると浜松中学に入学し、二年生で沼津中学に転校し、三年生の夏休みに海に設けられた水泳場で本格的に水泳の講習に参加する。洪作は海で泳いだことがなく、水泳に苦手意識を持っている。そんな洪作を上級生の岡は無理やり泳がせようとする。そして洪作は浜から離れた飛込台に一人で取り残され、別の少年たちがボートを漕いで助けに来る。

1ボートは体を飛込台の脚につけると、一人の少年が飛込台の上上がった。少年は台の上に立つと、洪作の頭のとっぺんから爪先までしげしげと見たから、

「泳げないのか」

と訊いた。

「うん」

岡の奴に、ここへ持って来られて、置いて行かれたのか」

「うん」

「ほう」

ひどく感心したように洪作の顔を見入っていたが、飛込台の下のポートの方に、

「若サマハ ココニイラシツタ」

とそんなことを奇妙な口調で言った。すると、

「ドウレ デハ、才救ケ申ソウカ」

そんな声が返って来た。

井上靖『夏草冬濤 上』新潮文庫 一七頁

1の例の中ほどに「岡の奴に、ここへ持って来られて置いて行かれたのか」という発言がある。この発言には洪作に対する「人」ではなく「物」への〈見立て〉が見られる。人事等の抽象的な操作では「人を持つてくる」「人を置く」などの表現を使用することがあるが、その場合の個々人は具体的な人ではなく、抽象的な記号と化している。この発言では本来「人」である洪作を「物」扱いすることで、岡の非道さを強調するとともに、洪作の味わった恐怖感や理不尽さなどに対する読者の共感を容易にする働きがあると考へる。

また、後半に「若サマハ ココニイラシツタ」「ドウレデハ、才救ケ申ソウカ」という芝居のせりふがあった発言が出てくる。これが日常言語を基にした発言ではないことは内容からだけでなく片仮名表記によるところからも理解できる。そして、ここには自分たちを芝居の劇

中人物(待)に〈見立て〉て洪作と自分たちとの関係を「若様」と「家臣」に見なす行為がある。(見立て)はこのようなごっこ遊びともつながっている。

さらに同書の水泳場における場面には2に示した水泳場にいる「中学生」を「河童」に〈見立て〉た例や、3のように落ちてくる「雨粒」を「散弾」に〈見立て〉た例など、同じく〈見立て〉に基づく表現が散見される。

2叫び声や喚声は絶えず起こっていたが、それらは波の音で消されていた。どの水泳場も一つか二つの飛込台を持つており、いつそこへ目をやっても、夥しい数の河童たちがそこにたかっていた。

井上靖『夏草冬濤 上』新潮文庫 七頁

3雨が落ち始めた。頬にも、額にも、肩にも、腕にも、雨滴の散弾が見舞い始めた。大粒の雨である。

井上靖『夏草冬濤 上』新潮文庫 一四頁

他に名詞ではなく、複合動詞にも〈見立て〉が入り込んでいる。4、5の例に見られる「突きささる」は通常「棒状のもの」を主語とし、4のように使用する。しかし、5の例では「人」が水面に飛び込むことを「突きささる」と表現している。したがって、ここでは「人」を〈見立て〉によって「棒状のもの」にずらして表現していることになる。

4 洪作は二本のオールを握った。ボートは波に乗って、高くなったり、低くなったりしている。オールは潮を捉えないで、空を切ったり、潮の中に突きささって、そのまま動かなくなったりした。

井上靖『夏草冬濤 上』新潮文庫 二二頁

5 寒いのか、ぶるぶると顔をふるわせていたが、やがて、ずんぐりした方は、ひとつ跳躍すると、いきなり頭を下にして、海面へ突きささって行った。

井上靖『夏草冬濤 上』新潮文庫 二〇頁

また6、7の例における「送り届ける」には（見立て）による用法の（ずらし）によって全体の意味と構成要素の意味とにずれが生じている。

6 小さな悪事を重ねてきてもいるし、その弱味を傘屋の徳次郎につかまれている、徳次郎がそれを表沙汰にしないかわりに、繁蔵は耳へはさんだ犯罪の情報を、徳次郎へ送りとどける。

池波正太郎『剣客商売 波紋』新潮文庫 二六頁

7 朝早くから諸方をまわり、聞き込みをつづけてくたぐたに疲れきった傘屋の徳次郎が親分の弥七を送りとどけ、池波正太郎『剣客商売 波紋』新潮文庫 二六頁

「送り届ける」は構成要素となる「送る」が「人」も「物」も対象とするのに対し、「届ける」は「物」は対

象とするが、「人」を対象にすることはできない。6の例は以下の文が同時に成り立つため、「送り届ける」全体の用法が構成要素となる動詞「送る」「とどける」本来の用法に合致していることが分る。

繁蔵は犯罪の情報を徳次郎へ送りとどける。

繁蔵は犯罪の情報を徳次郎へ送る。

繁蔵は犯罪の情報を徳次郎へとどける。

しかし、7の例では本来構成要素となる「届ける」の対象にならない「人」が「送り届ける」全体の対象になっており、ずれが生じている。

弥七を送りとどける。

弥七を送る。

* 弥七をとどける。

このような「送り届ける」における複合動詞全体の用法と構成要素の用法とのずれは「人を送ること」に「物を届けること」のイメージが重ね合わせられることにより、生まれ、本来の用法から「人のある場所まで連れて行く」という用法が拡張したものである。ここにも（見立て）に基づく、像の二重写しによる（ずらし）が入り込んでいると考えられる。

同様に以下の例における「斬り結ぶ」「擦り寄る」

「叩き付ける」なども構成要素となる動詞本来の用法から見ると結び付くことのない動詞が像の重ね合わせによって結び付けられ、成立していると考える。

8 永山精之助が挿んでいた大刀にも数ヶ所の刃こぼれがあり、してみると永山も相当に犯人と斬りむすんだらしい。池波正太郎『剣客商売 波紋』新潮文庫二五頁
9 「親方……」

徳次郎へ擦り寄って来た岩戸の繁蔵が、
「永山の旦那が殺されたんだそうですね」と、ささやいた。

池波正太郎『剣客商売 波紋』新潮文庫二七頁
10 山口為五郎が振り向きざまに、小兵衛へ刃を叩きつけた。

池波正太郎『剣客商売 波紋』新潮文庫四一頁

類例に以下のようなものがある。

畳みかける・すり抜ける・売り飛ばす・買い叩く
盗み見る・咲き誇る・咲きこぼれる・飛び起きる
飛び出す・飛び付く・飛び出る・飛び抜ける
飛び退く・書きなぐる・書きたてる・書き流す
書きもらす・言いたてる・言いつくろう
言いよどむ・聞きかじる・聞き届ける・聞き流す
聞きもらす・立ち至る・立ち入る・立ち去る

立ち止まる・立ち並ぶ・立ち働く・立ちまさる
立ち寄る・踏みしめる・噛みしめる・切り上げる
切り替える・流れ歩く・舞い戻る

以上、日本語の言語表現中に現れた〈見立て〉の例を見てきた。日本文化の芸術の世界における〈見立て〉には明らかに作り手の創意に基づく、意図的な〈ずらし〉や〈機知〉などが込められていた。しかし、「俺の肝臓はフオアグラ状態だ」といった冗談めかした言い回しや名詞同士を組み合わせた複合名詞による命名はともかく、文章中に見られる例ではあまりにも自然に〈見立て〉が入り込んでおり、〈ずらし〉や〈機知〉の表明が、どの程度強く意識されているか明確ではない。と言うよりもむしろ、ごく自然に〈見立て〉が入り込んでいると考えた方が良いのかもしれない。このような〈見立て〉が日本語に入り込んでいることについて、次に〈見立て〉と日本語とを〈事態把握〉と関連付けながら論じていきたい。

四、事態把握から見た〈見立て〉と日本語

前述のように〈見立て〉はある事物に異なる事物の像を重ね合わせる、見出す、ということ成り立つ。芸術の分野に見られる〈見立て〉には結び付けに〈飛躍〉が認められたが、日本語に見られる〈見立て〉には〈飛躍〉が感じられないものも存在し、自然に入り込んでい

るように見えるものもある。

そこで、「見立て」を日本人の事態の捉え方、つまり「事態把握」に基づき、本人が意図するかしないかに関わらず、日本人の様々な表象に現われているものと考えてみたい。その場合、日本人の「事態把握」とは何か、それがどのように「見立て」と関わるのかということが問題になる。そこで、以下日本語の特徴から指摘されていることを踏まえ、「見立て」と「事態把握」との関係性を述べたい。

池上嘉彦によれば「事態把握」という観点から見ると日本語は「事態の主観的把握」に基づき、話者が問題の事態に身を置き、臨場的、体験的に語る、という言い回しを好む言語であると言われている¹¹。そして「状況の中に存在していて、本来ならば言語化の対象となるはずの話し手自身が、「事態の主観的把握」の場合、他者を定位する原点となり」、「それ自体は言語化の対象とされるものの範囲から外れてしまう」ことになる。日本語において主語が明示されないことが多いことや、「嬉しい」「悲しい」などの感情形容詞の感情を抱く主体や「見える」「聞こえる」といった感覚を表す動詞における感覚の主体が原則として一人称であることなどは日本語が「事態の主観的把握」が相対的に広い範囲で許容される言語であることの現れである¹²。

また、熊谷（二〇一一）では日本語が映像的な言語であるということが指摘されている。日本語では以下のよ

うな会話が見られる。

A なかなか来ないね。

B あ、来た。

A どこ？

B あそこ。

A あのメガネの人？

B いや、その後ろの人。

A あれが高橋さんか……。

この時、会話を交わすAとBは同じ方向を見て、待ち人が現れるのを待っている。Bだけが待ち人の姿を知って進められ、きわめて省略的な、二人のあいだでしか通じないものになっている。右の例に端的に表れているように熊谷は発達心理学の「共同注意」の概念から、日本語は話し手、聞き手、共有映像の三項関係に強く依拠する言語であると主張している。そして、人と人とが相並んで目の前の映像を注視するという形を基本として、言葉が組み立てられているとする。

池上の言う日本語が「事態の主観的把握」に基づき、話者が問題の事態に身を置き、臨場的、体験的に語る、という言い回しを好む言語であること、熊谷の言う日本語が映像的であることは日本語話者の内省から見ても首肯されることである。そして、異なる事物の像を重ね合わせる「見立て」が日本文化や日本語に多く見られることとの強い相関性が感じられる。

これらに従えば日本人は元来自分が場と一体化し、目の前の〈見え〉をもとに映像的に事態を把握し、かつ、そのような映像を聞き手と共有しつつ、コミュニケーションを図る、ということを行ってきたということである。〈見立て〉が成立する背景には作り手による異なる事物の像の重ね合わせと受け手によるその受け止めがあったが、それは日本語によるコミュニケーションと共通する部分がある。つまり、日本文化や日本語に〈見立て〉が多く含まれるのはそこに作り手と受け手との対話が存在するからであり、日本語に見られる〈事態の主観的把握〉の傾向、日本語が映像的であるという特徴がもたらしたものであると考えられる。

五、まとめ

本論では日本文化の基層をなす〈見立て〉を起点とし、その日本語への現れを指摘するとともに、両者と日本語の持つ臨場的、体験的に語ることを好む傾向、映像的に語るという特徴との関わりを論じた。日本文化における〈見立て〉は日本人の〈事態把握〉やコミュニケーションが映像的になされるといふことと共通した基盤の上に存在していると考えられる。〈見立て〉と日本語との関わりをさらに広く深く考察していくことを今後の課題としたい。

付記 本論は二〇一二年度サントリー文化財団人文科学、

社会科学に関する学際的グループ研究助成を受け
てなされた。

注

- 1 池上 (二〇〇三) (二〇〇四) (二〇〇六) (二〇〇七)
- 2 熊谷 (二〇一一)
- 3 渡部 (一九九六)
- 4 龍居 (一九九六)
- 5 早川 (一九九五)
- 6 服部 (一九七五)、山田 (二〇〇二)
- 7 山田 (二〇〇二) 五六頁
- 8 三浦 (一九九六)
- 9 根来 (一九七四)
- 10 早川 (一九九五)
- 11 池上 (二〇〇三) (二〇〇四) (二〇〇六) (二〇〇七)
- 12 池上 (二〇〇七)

参考文献

- 池上嘉彦 (二〇〇三) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の
指標 (一)」『認知言語学論考三』ひつじ書房
- 池上嘉彦 (二〇〇四) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の
指標 (二)」『認知言語学論考四』ひつじ書房
- 池上嘉彦 (二〇〇六) 『英語の感覚・日本語の感覚 〈ことばの
意味〉のしくみ』日本放送出版協会
- 池上嘉彦 (二〇〇七) 『日本語と日本語論』ちくま学芸文庫

池上嘉彦・守屋三千代・百留康晴・百留恵美子（二〇一一）

「『見立て』から考える日本語と日本文化の相同性―比喩との相違を視野に入れて―」『日本認知言語学会第十三回大会予稿集』

北山修編（二〇〇五）『共視論』講談社選書メチエ

熊谷高幸（二〇一一）『日本語は映像的である 心理学から見えてくる日本語のしくみ』新曜社

龍居竹之介（一九九六）「見る者が選ぶ庭の〈見立て〉」『日本の美学』二四 特集見立て『ぺりかん社

新形信和（二〇〇七）『日本人の〈わたし〉を求めて 比較文化論のすすめ』新曜社

根来司（一九七四）「枕草子の文体―「見立て」と「をかし」

『国語と国文学』五一―四

服部幸雄（一九七五）「『見立て』考」『変化論 歌舞伎の精神史』平凡社

早川聞多（一九九五）「見立絵について―「見立て」の構造と意味―」武田恒夫先生古稀記念会編『美術史の断面』清文堂出版

三浦広子（一九九六）「歌舞伎における見立て」『桜姫東文章』の場合』『日本の美学』二四 特集見立て『ぺりかん社

山田奨治（二〇〇二）『日本文化の模倣と創造 オリジナリティとは何か』角川選書

渡部泰明（一九九六）「中世和歌と見立て」『日本の美学』二四 特集見立て『ぺりかん社

『日本の美学』二四 特集見立て『ぺりかん社（一九九六年）

（島根大学教育学部准教授）